

没後38年

土方巽

を語る11月

XIII

The 38th Anniversary of Hijikata Tatsumi's Death

Talking together about Hijikata Tatsumi



2024年1月21日(日) 13:00 開場

14:00 開会 (16:30 閉会予定)

ゲストスピーカー：吉増剛造

慶應義塾大学三田キャンパス

東館6階 G-Lab

事前申込不要

参加無料・入退場自由

オンライン配信あり(Zoom Webinar)



撮影：黒田康夫

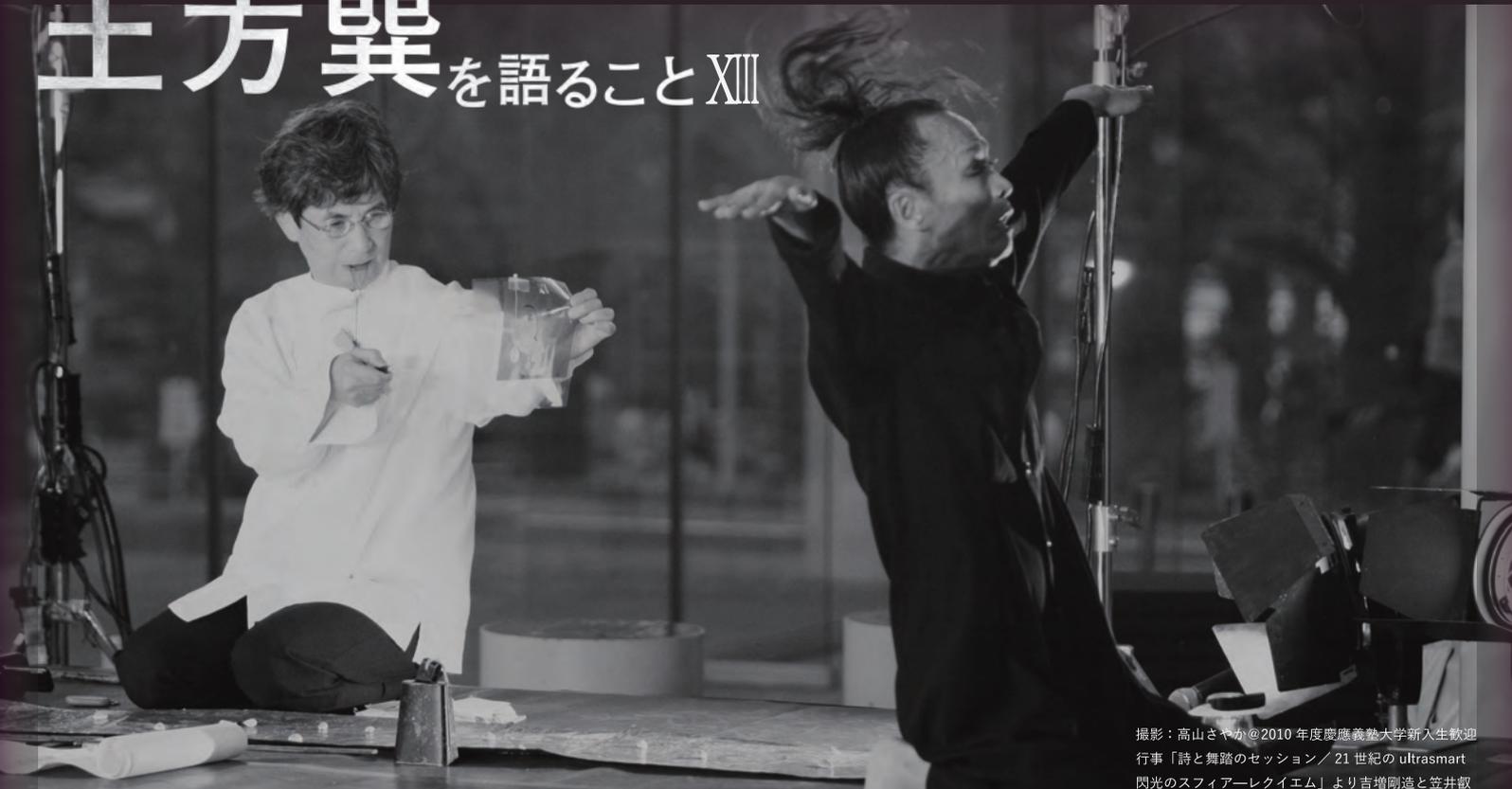
主催：慶應義塾大学アート・センター

企画：慶應義塾大学アート・センター土方巽アーカイブ
ポートフォリオ BUTOH

協力：土方巽アスベスト館、NPO 法人 舞踏創造資源

没後38年

土方巽を語ることXIII



撮影：高山さやか@2010年度慶應義塾大学新入生歓迎行事「詩と舞踏のセッション／21世紀のultrasmart 閃光のスフィア・レクイエム」より吉増剛造と笠井敬

"あまい雪の色のよな、……" 土方さんの声が、わたくしの脳裏に投射(遠く映しだ)されていた。もう、五十回、百回とこの声の根の、涼しさ、遠さを聞いていた。不図、わたくしにとって"土方巽の声"に耳を傾ける、根の言葉にこうして出逢ったと思う、それは"遠さ"であった。この"遠さ"を、根か切株か、あるいはどこかの山際の接木に、宇宙の敷石にして、もういちど土方巽という、謎の、稀有の舞踏家の姿を脳裏に映してみる。

吉増剛造「土方巽／遠さ」『舞踏言語—ちいさな廃星、昔恒星が一つ来て、幽かに“御晩です”と語り初めて、消えた』、論創社、2018年。



○吉増剛造

1939年東京生まれ。1957年慶應義塾大学文学部入学。在学中に岡田隆彦、井上輝夫らと『三田詩人』に参加、詩誌『ドラムカン』創刊。1964年処女詩集『出発』、『黄金詩篇』(1970)で第1回高見順賞。『熱風 a thousand steps』(1979)で第17回歴程賞。『オシリス、石ノ神』(1984)で第2回現代詩花椿賞。『螺旋歌』(1990)で第6回詩歌文学館賞。『雪の鳥』あるいは「エミリーの幽霊』(1998)で第49回芸術選奨文部大臣賞。2003年紫綬褒章。「詩の黄金の庭 吉増剛造展」(北海道立文学館/2008)。『表紙 omote-gami』(2009)で第50回毎日芸術賞。2013年旭日小綬章、文化功労者、福生市民栄誉賞。2015年日本芸術院賞、恩賜賞、日本芸術院会員。「声ノマ全身詩人吉増剛造展」(東京国立近代美術館/2016)。「涯テノ詩聲 詩人吉増剛造展」(松濤美術館/2018)。映画『幻を見るひと 京都の吉増剛造』が国際映画祭10冠。七里圭監督作品『背』(2022)主演。『Voix』で第1回西脇順三郎賞(2023)。第6回井上靖記念文化賞(2023)。現在、『三田文学』理事長。

タイムテーブル

- 13:00 開場
- 14:00 開会 土方巽と舞踏を語る(ファシリテーター:森下隆)
- 15:00 ゲスト登壇
- 16:30 閉会予定

ごあいさつ

土方巽没後38年を迎えて、例年のように2024年1月の命日に「土方巽を語ることXIII」を開催します。2023年はまた土方巽アーカイヴがお世話になった人たちが鬼籍に入られました。秋田時代の土方巽を知る棚谷文雄さん、そして東京を浮浪していた1950年代の土方巽を知る小島政治さんとヨネヤマ・ママコさんです。舞踏以前の土方巽、そして舞踏の原点となる時期の土方巽について、これまでお三方から貴重な証言をいただくことができました。

*

土方巽は1973年9月に西武劇場での舞踏公演〈静かな家〉での舞台に立ち、ついで10月には日本青年館での大駱駝艦・天賦典式〈陽物神譚〉に客演しました。土方巽はこの二つの舞台での踊りをもって、二度と舞踏の舞台に上がることはありませんでした。2023年には黒田康夫の写真展“TATSUMI HIJIKATA THE LAST BUTOH”がロサンゼルスギャラリー Nonaka Hill で開催されました。この「最後の舞踏」は土方巽の新しい舞踏の始まりでもあったのです。「一步、また一步と生命が歩き、その生命に肉体が引きずられる」舞踏でした。決して舞台を降りるべき舞踏家の踊りではありませんでした。自ら舞台を降りた土方巽は、1974年には舞踏の新たな活動を展開します。新宿アート・ビレッジ、ついでシアター・アスベスト館での連続公演の驚くべき舞踏活動でした。2024年は、50年前に土方巽がなぜ舞台に立つことを辞めたのかをあらためて問いかけます。

*

没後38年の「土方巽を語ること」はゲストスピーカーとして吉増剛造さんを招いてお話をさせていただきます。詩人としての吉増剛造さんについて紹介するまでもありませんが、近年、吉増さんは次々とドキュメント映像に出演されて、まさに静かに生命の火を燃やしつづけてられています。吉増さんは、1968年の土方巽のソロ公演《土方巽と日本人——肉体の叛乱》で土方巽の舞踏に初めて立ち会い、それ以降も土方巽の舞台に接しています。そして、50年を超えて、土方巽の踊りについて語り、街角での歩行について語り、さらには土方巽の言葉の声に耳を傾けてこられました。2024年1月21日は、吉増剛造さんと語り合う場にぜひご参集ください。

(森下隆記)